

徳永さんとの出会いは、昭和56年6月18日付けの毎日新聞の記事を偶然に目にしたことからは始まりました。当時、私はサラリーマンの定年を数年後に控えて、工業英語の通信教育を受けながら今後の勉強の仕方をあれこれ模索していました。その記事には、新サラリーマン「勉強会」というタイトルで、徳永さんを会長とする『大阪工業英語研究会』の活動が記載され、これこそ、通信教育には欠けた、工業英語への有効なアプローチの方法であると思いました。実際に徳永さんにお目にかかりましたのは、通信教育を一応終えた、ほぼ一年後の昭和57年7月4日の大阪科学技術翻訳士会の懇談会場でした。予想した通り、徳永さんは温厚な人柄とともに、工業英語への情熱を持つ研究会の会長としてふさわしい方でした。そこで早速入会の手続きをとりましたが、これが徳永さんとの初めての出会いとなりました。

研究会において徳永さんは、何時も最前席に座り、講師の水上先生に、高齢にもかかわらず積極的に質問され、先生から出される問題は、ご自分の番が来ると必ず回答されることに感銘を受けました。何事も勉強というものは、年齢に関係なく、その人の意欲如何によるものと痛感した次第です。

また会の発足から長年にわたり代表幹事として、会の運営および財政を殆どお一人でされたとのことで、私が後日幹事になり財政だけを担当したことに比べ相当なご苦勞であったと思います。また熱海、白浜、琵琶湖等の

年1回の研修旅行にも参加された時の、お年に似合わない元気な足取りが思い出されません。

我々会員として大いに啓蒙されたことは、水上先生の講義録の内容の詳細な執筆でした。昭和52年6月から平成3年6月までの合計1282ページにわたる7分冊となりました。驚くことに全て徳永さんの自筆です。これは今思えば、我々大阪工業英語研究会(OSTEC)会員に対して将来の行くべき道を示した、徳永さんのメッセージではないでしょうか。それは、俳号「槻彦」を持つ徳永さんが、第5分冊に載せた下記の俳句にその願いが深く込められているようです。

「どこまでもこの道行かむ鳥雲に」